貝殻城旅行雑記

白石薬子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
貝殻城旅行雑記

【Ｎコード】
Ｎ８２７０Ｊ

【作者名】
白石薬子

【あらすじ】
数日の旅行から戻ってきた二人が、旅先の思い出を語るでもなくだらだら過ごしている
夏の昼下がり
旅先の海の幻想を見ながら、恋愛付近を行き戻りする女同士の話

白磁の陶器。
秒針が駆け足で半周したころ、白い小さな茶碗の蓋を開ける。中国茶のよい香りが立ちのぼる。阿里山金萱、台湾の烏龍茶なのだと、売り場のお姉さんは言っていた。
歳は私と同じくらい、もしくは若干年下だろうか。名札に店長の肩書きのある女性は、手軽に飲める中国茶としてこれを薦めてくれたのである。
帰路を、夜行列車も含めて、二十時間以上鈍行を乗り継いでようやく帰ってきた私の部屋。そこはひんやりとした、午後三時の暗がりに満ちていた。往復で計算すれば、約二日間電車に乗っていた計算になる。
五日ぶりに開け放たれた窓から、木々を揺さぶって風が通り過ぎていく。矢井さんの長い髪の一本だけ、ふわんと宙に浮いた。それはうっすらと差し込む陽光に、きらりきらめいたから目に止まったのだ。
やがて吹きすぎた風に、とろりと頬に垂れた一滴の髪の毛を、彼女の中指が耳元までかき上げる。その頬はしっとりしていて、私はそっと、視線を今開けた蓋の中へと落とした。さて茶を啜ろうか、まだ香りを楽しもうか。
どこかの部屋に下げられた風鈴が鳴る。上の階だろうか、下の階だろうか。自分の済んでいるマンションの、どの部屋から聞こえてくるのかは判らない。涼しい音、ちりりん、
「いい風ね」
「そうですねぇ」
矢井さんの言葉に適当に相槌を打っていると、彼女の指先がひょいと蓋碗をつまんで持ち上げた。
私から、いい香りですよ、と聞いていたからか、蓋を開けると彼女

はそのまますうっと息を吸い込んだ。矢井さんの形よい鼻腔が膨らんで、横隔膜が微かに下がった。その一連の動きに顔の筋肉が反応して、その個性的な大きな瞳は自然に閉じられる。

「おいしい」

お茶を啜る前に、矢井さんの唇から漏れた言葉がそれだったので、私はなんだか嬉しくなった。

「美味しい」

口をつけて、もう一度同じ言葉を矢井さんは繰り返す。

そうですね、とうなづく私の言葉は、同意というより刺激に対する反射みたいなもので。私も、おいしいと囁いた。碗の茶を一口含んで。

家の中でも、私たちは襟元にタオルを巻いている。首筋からにじみ出る汗を吸わせるためだ。今年の夏は猛暑だと言う。自分の働いている職場の噂話でも、テレビのニュースでもそんなことを言っている。

頭がくらくらするほど暑いから、私にはわざわざそんな断りを入れる必要は無い。けれどそういうニュースは、矢井さんのような人に、最大公約数の意見を伝えるためにあるのかもしれない。

空気が乾いてすごしやすいじゃない。

今回の小旅行の間、その言葉を何度聞いたことか。炎天下の強行軍に私は半ば青冷めぐったりとし、矢井さんはすごいなあなんてぶつぶつ言いながら従ってきたのだ。

と言っても、彼女の汗腺が働いていないわけではないらしく、クーラーの利いていない場所から出ると、彼女の細く形のいいあごからはきちんと、幾度も汗がつたうのだった。

そんなわけで、この旅行中白いハンドタオルが大活躍したわけだ。今も活躍している。我が家に着いて順番に顔を洗ったとき使ったタオルが、首に巻きついている。つい半時前に巻いたばかりなのに、もう汗でしっとりしている。

それでも矢井さんは暑いなんて言わない。

痩せ我慢でなくて、彼女はそれが平気らしいのだ。夏は暑いのがあたりまえだ、と彼女は言うのだった。

妙齢の女性が二人で首にタオルを巻いている図は、なんだか間抜けに思えたけれど、でも私達の間では似合っている気がする。汗がにじんできた額を、もう一度タオルの端でぬぐう。

また、風鈴。りりん。

残りのお茶を注いでおいた口の広いガラス壺から、湯気がやんわりと立っている。飲み終えた矢井さんの手が、壺の首筋を持って引き寄せた。碗の中に再び茶が注がれると満ちていた香りが、ふわ、と部屋の空気を揺らす。

「ぁあー。いい香り」

彼女の手首から肘まではほっそりと引き締まっているけれど、二の腕は思ったよりぷにぷにしている。鶴のように痩せている矢井さん。それなのに、その柔らかさはサギだ。

ふうふう息を吹きながら碗に口をあてる矢井さんは、相変わらず全身で世界を楽しんでいる。その姿をうっとり眺めていると、不思議な気がした。あれ？　私は首をかしげる。

彼女がワンピースから今の服装に着替えたのはいつだっだろうか。今着ているのは、生地が優しい色になっている履き慣れたジーンズと、緑のタンクトップに合わせたTシャツだ。鞄の中身を広げてもいい場所でなければ、矢井さんは着替えられないはずなのに、いったいいつ着替えたんだっけ。思い出そうとしたけれど、旅の疲れか記憶が曖昧にごっちゃになる。いつ着替えたんだっけ。

「何？　」

花が開くように彼女のまぶたが開いた。悪いことをしていたみたいに、私の身体がぴくっとする。私にまじまじと見られていたのに気が付いたのだろうか？　慌てる私を面白そうに眺めてから、矢井さんが尋ねた。

「あたしの顔、なんかついてる？　」

旅行中に二人で貝殻城に渡ったのは、昨日の昼間だったか。
その日最後の観光を終えて、そこから私鉄に乗りＪＲに乗り継いで栄えている街まで戻ってから酒を飲み、夜行列車を待った。あの小ぎれいなチェーンの大衆酒場では、矢井さんは確か今の服装でカウンターに座ったはずである。それが昨日の夜のはず。
しかし、その日、つまり昨日の朝に、矢井さんは白いワンピースを着てフェリーに乗ったのだ。今着ていないとしたら、つまりそのワンピースは、私の本棚の側に立てかけられている、あの小さな黒いかばんの中できれいに折りたたまれているはずだ。彼女は収納が上手い。
白いたっぷりしたすそのワンピース。柔らかな布地は潮風に煽られて、フェリーの上でばたばたとはためいていた。
「帽子、飛ばされないようにしなくっちゃ」
矢井さんはぎゅっと胸元に大きな麦藁帽を抱えて、言った。お気に入りらしい。矢井さんの長い髪は旅行中、いつもその大きな傘から流れ出していたものだった。
「持ってましょうか？」
どっど、と鳴るエンジンの音に負けないように、お腹に力をこめて聞くと、いいわよそれよりターはカメラ落としちゃ駄目よ、と答えが帰ってきた。これ落としたら、私は飛び込んで追ってきますよ、私は笑ってカメラを向ける。
ぱしり。
わかっていたことだったけれど、矢井さんは流れるようにフレームから逃れていた。私の白いタオルが一瞬潮風に煽られる。
ばたばたばたばた。
矢井さんのスカート、白い雲みたいにたわんだ。
「けち」
「けちで結構、結婚もう遅い♪」
むくれた私に矢井さんは笑って、甲板の上でステップを踏んだ。
彼女の履いているのは皮をなめしたサンダルで、その軽やかな足首

に従って、跳んだ。

＊

「写真、いつゲンゾーするの？　」
　彼女の強い視線と目が合って慌てている私に、矢井さんは質問を代えて尋ねた。ゲンゾーゲンゾー、ムラタゲンゾー、誰だっけ？村田ゲンゾー。そんな言葉を口ずさみながら矢井さんが問う。
「誰ですっけ、村田源蔵」
「違う違う、あたしが聞きたいのはそっちじゃない」
　矢井さんは手をひらひら振りながら、苦笑気味に言った。知りたいのは写真のゲンゾーのこと。そんなことは私だってわかっている。しかし私はすました顔でぬるくなってきた烏龍茶を啜った。飲み干した白い碗の底に、海亀の横顔が映ったので蓋を閉める。
「いつ、写真現像するのよ」
「写真に撮られたくない人のリクエストなんて、知りません」
「その代わり被写体のリクエストはしたでしょ？　」
　そうなのだ。
　自分はカメラを持ってきていないからと、矢井さんは自分が気に入った風景を次々と私に撮らせたのだ。
　川端で咲き誇るハイビスカスや、乗り換えの時降りたレールと車庫しかない殺風景な駅、緑の繁る山々が遥かに見える、大昔の役所跡を始めとして。
　生ビールあります、の意味の「生あります」と言う看板の字の「生」。その左斜め上の、ノのはねが掠れて消えて「主あります」になっている飲み屋の看板とか。
「コイのえさ」の自販機とか。
　首なし地蔵とか、北の祖国を取り返す日が北と書かれた看板とかの、矢井さん的にツボなものもたくさん撮らされた。
「要求されたコマンドは却下されました」

「えー？！　」
なさけない声を出しているわりに、彼女の視線は強い。有無を言わせぬといおうかなんというか。けれど私だっていつまでもその迫力に負けて入られない。次のお給料入ったら、とそっけなく言った。
「次のお給料っていつよ」
「後十日」
「十日後？！　そんなに待てないよー」
よーよーよーと一人エコーを演じながら、矢井さんはぷうと頬を膨らませた。やがてその唇から、しゅわしゅわ、と息が漏れる。
「お茶お代わり入れますね」
すねたふりをする彼女から目を逸らして、タオルを置き、代わりに空になったガラス壺を持って立ち上がると、軽くなった肩を風が撫ぜた。うなじがひんやりとした。

元来私は面倒くさがりなのだ。そして今では、それを恥ずかしいと思わないくらいに、堕落してしまっている。年齢が年齢だから、外面はしっかりした風を装っているけれど、実際はそんなこと全然無いわけで。社会人という枠の外に出た瞬間にふにゃふにゃになってしまうのだ。まだ学生時代の頃のほうが、全てにおいてきちんとしていた気がする。潔癖だったと言ってもいいかもしれない。外側は学生らしくへらへらしていたけれど。
けれど矢井さんは違う。いつもへらへらしている。まじめな顔でも、いつもへらへらしている。私より二つばかり年上の彼女は、いつでもどこでもスタンスを崩さない。真面目に、不真面目なのだ。だから社会人には到底向いていないと思う。でたらめとかいいかげんとか、勿論悪ふざけではなくて、不真面目。自由人といえば聞こえはいいけれど、呆れるくらいふにゃふにゃなことのほうが多い。その癖変なところで潔癖なのだ。
今日の朝、夜行列車の終着駅についた時のこと。駅のホームに下りた瞬間、矢井さんは「あ！！　」と叫んだ。帰路の全行程の、ち

ょうど半分にあたる駅である。夜行列車の終着　駅だからと言って、旅の終わりではない。これからまた鈍行を乗り継がなくてならない。そのための駅である。

「どうしました？　」尋ねれば。

「パンツ、代えるの忘れた！！　」

　朝七時五分の駅のホームはそろそろ込み始めた頃で、周囲の人の何人かが振り返って私達を見た。そのうちの一人二人は足を止めてまじまじと見る。矢井さんは私より十センチは背が高い。私も背は低い方ではないのに、少し見上げてしまう。モデルのような身長である。スタイルも顔も、モデルそのままである。

「いーじゃないですか。私も代えてませんよ」

「ううん！　駄目！！　今日はずっと電車だったから仕方ないけど。なんで昨日の夜代えるの忘れてたのかしら……」

　矢井さん言うところの昨日とは、ネットカフェで一夜を明かしたことだ。

旅先のネットカフェで、一晩明かすのも面白いかも、という私の提案に、矢井さんが全面的に賛成した結果である。しかし、あの店は確かシャワーつきで、矢井さんもそこでシャワーを浴びていたはずではないか。その時に代えなかったのだろうか？

　そのことを指摘すると、ああ、と思い出した顔つきになって、みるみる不機嫌そうになった。

「服しか、着替えてなかったのよ。酔っ払ってたから」

「ワンピースには着替えたのに？　」

「だって、海に行くって言ったから……」

　うつむきながらぼそぼそと言い返す矢井さんに、じゃあこの駅のトイレで着替えたらどうですか、と尋ねたら、彼女はそのきれいな顔に恨めしそうな表情を浮かべた。

私の発言は、矢井さんがそんなことできないことを知っていての、ちょっとした意地悪である。きっと下着は、矢井さんの鞄の小さな隙間にぴったりとつまっているに違いない。もし取り出して収納し

なおすとしたら、とてもトイレの狭い空間では間に合わないだろう。特に衣類は、一度空気を吸ってしまったら膨らんでしまって、畳み直さなくてはいけないはずだ。あの白いワンピースも、勿論。

矢井さんはううう、とうなって、ここはターを見習うか、と呟いた。私も確かに、同じ下着を履きっぱなしなのだ。

結局矢井さんは、その後下着を代えないまま私の部屋にいる。マンションの二階の角部屋。午後になると他のマンションやアパート、庭木の陰になる私の部屋でお茶を飲んでいる。

矢井さんはいつ自分の家に帰るんだろう？

明日は私も仕事がある。会社には旅行のことは内緒で、明日に疲れを残してはいけないのだ。なんせお土産も買ってないのだから。どんな口実で取ったのか忘れるような陳腐な口実で、私は続けて四日間の有給を手に入れたのだ。月曜日仕事に出て、仕事帰りにそのまま夜行にのり、旅先で二泊してから帰る。帰りも夜行である。行きも帰りも鈍行で、どんなに早い接続でも、約一日電車に乗りつづける羽目になる。車中泊という奴だ。旅行の半分を乗り物の中で過ごすと言うのは、休める設備があるならともかく、それほどロマンチックな物ではない。

もし旅行に行っていたなどと知れたら、と思うと、ぞっとする。露骨に「こっそり婚前旅行じゃないの？　」なんて聞く奴もいるのだ。放っておいて欲しい。第一お前は、結婚したらもう旅行は行かないのかと聞いてやりたい。婚後旅行とでも言うのか。

まあ、ただの嫌味なのだろう。大体社会人の常識として、こう言う旅行は、土日を交えて行くのが普通なのだ。何故週のど真ん中に行く必要があったのかといえば、矢井さんいわく。

「休日は、人が込むじゃない」

こういってはなんだが、毎日をふらふら過ごしている矢井さんとは違うのだ。定職を持たずにすむ矢井さんには分からないだろうけれど、他の人を自分と同じ尺度で捕らえないで欲しい。そんな反論

もしたけれど、彼女はにやにや笑って取り合わない。
しかし私にだって問題はある。普通の人はそんな提案についていかないのだ。一事が万事その調子の矢井さんに合わせた私の責任もあるのだから、文句を言ってはいけない。
だから。
とお茶を啜る彼女の姿を見ながら私は思う。私はそんな矢井さんと、ずっと一緒にいたわけで、少し気が抜きたいのだ。
普通どんなに大好きな人とだって、四六時中一緒に居たら、落ち着かなくなる。その上明日は仕事に戻る。場合によっては、土曜日の出勤も考えなくては。だるい、気持ちも身体もゴリゴリする。けれど矢井さんは帰らない。まだ帰らない。いつ帰るのだろう。いつまで居てくれるんだろう。
ほっとしたような、不安なような気持ちになって、私は耐熱ガラスのティーポットに勢いよく熱湯を注いだ。開いた茶葉が小さなポットの中でくるくる回る。蓋を閉めてその丸い胴に、気をつけて湯をかけていく。こうすると香りよくお茶が出るのだそうだ。中のお湯だけでなく、外からの熱で温まった器が、程よく茶葉を蒸らすのだろう。真上から全体に満遍なくお湯を回しかけるのが、理想的なんだろうけれど、そうするとティーポットの口からお湯が入ってしまう。
一分経過。
中の茶をガラス壺に移し変えると、キッチンに茶の香りが立った。キャラメルのような、蜂蜜とミルクが混ざったような、けれども決してべたべたと下品ではなく、ああお茶なんだな、と分かる清清しい苦味と甘味のある香り。美味しいの入りましたよ、矢井さん。
ふとさっきまでいたリビングを見る。蒼い海があった。打ち寄せる波ではなく、満ち満ちた海。
そうか。
旅行先から、海を連れて来てしまったのか。

その潮の匂いを嗅いで、私は思う。それじゃあ私は泳いでいかなくてはならないのかな。そしたらこのガラス壺の口は片手で蓋をしなくてはならないな。ガラス壺にわざわざ茶を移すのは、ティーポットの中でお茶が茶葉から出過ぎないようにするため、煮出したお茶の濃いところと薄いところを無くすため。そのための茶器を茶海と呼ぶらしい。

隣の部屋の海は、天井からさす光でぼんやりと明るい。海亀がぐるりと腹を見せて私の目の前を横切った。ひれを波打たせて旋回しながら、ゆっくりと上へはばたいて行く。

海亀は、大きな麦藁帽をかぶっていた。

＊

朝の薄暗がりに満ちていたフェリー乗り場の待合室。貝殻城に行くには、海を渡らなければならないのである。私達はネットカフェから出ると、朝食も食べずにフェリー乗り場に向かったのだ。

「海、うみ、ウミウミ♪」

バスの中でぐったりしながら、けれど矢井さんは口ずさんでいる。ぐったりもするだろう。昨日の晩は、まるでここの現地人のように屋台で散々飲み食いしたのだから。おでんの大根と牛筋をはふはふ言いながら食べ、瓶ビールをのみ、てんぷらをざくざく食べ、瓶ビールを飲み、最後の締めにラーメンをするする食べたときは、さすがにビールを飲まなかったけれど、それはその前にバーでしこたま痛飲したからだ。つまり今彼女は、二日酔いなのである。あれでまた瓶ビールを飲んだら酒豪と呼んでもふさわしかろうに、と言ったら、だってあたしカクテル十杯近く飲んだのよ、と返事があった。小刻みなバスの振動にゆらゆらしながら、この白いワンピースの美女は、バーテンの腕がよかったのよ、と呟いた。その胸元に抱えられた麦藁帽子。やんわり押し付けられて、彼女のふくよかな胸の形が変わっている。

空が青い。もしかしたら雨が降るかも、という頼りない昨日の天気予報が外れて、乾いた風が街路樹の、背の高いシュロを揺らした。流れる景色を眺めるとなく眺めていると、後ろの席から、けぷ、という微かなオクビが聞こえる。
「バーテンの腕が、よかったのよ」

埠頭で降りると、潮のにおいがした。バス停の側、目の前にフェリー乗り場があった。ここではオットセイのショーをしたり、多種の土産物があったりと観光スポットの一つらしい。ガイドブックを開いて説明すると、矢井さんは形よく色濃い眉をしかめた。
「でもまだ開いてないじゃない」
確かに、ガラス戸の向こうは薄暗く、何人かの人達がせわしなく行き来しているが、来館者を迎えるような空気とは無縁だった。こんな風景は、昔見たことがある。ライブ会場などのイベントスタッフのアルバイトをしていたことがあるけれど、その時の空気によく似ていた。
とは言え、ここで戸惑っていてもいいことは何一つ無い。ええ、ままよ！　いざという時に、決断が早いのが私の持ち味なのだ。
「大丈夫です、ガイドブックを見たらもう開館時間を過ぎてますし」
私がぐっと扉を押すと、すんなりと扉が開く。
「え？！　でも大丈夫？！　大丈夫なの！？　」
詰問するみたいにきつい声を出した矢井さんを横目に、大丈夫ですよ命まで取られません、と私は彼女を促した。
ガラス戸をくぐった矢井さんが、ああなるほど、と呟く。館内が暗い理由がよくわかった。ガラス戸の向こう側の広いホール。閉館時を思わせるくらい、そこがなぜ薄暗いのか。
円柱の水槽。
建物の天井に続く大きな一本の円柱が、光の柱のように海を湛えている。水槽の天井は天窓がついているのか、外界の光がぼんやりとうす暗がりを照らしているのだ。その仕掛けに、海とその外との

空間を隔てるガラスの壁が溶けて、海が宙を浮かんでいるように見える。近づくと、魚が泳いでいた。
「階段！　」
さっきまでの不機嫌はどこへやら、矢井さんが小走りに光の円柱を回りだした。
「螺旋階段！　」
らせんかいだんらせんかいだんとはしゃいで、矢井さんが上り始める。室内なのに麦藁帽子をかぶっている。まるで子供だ。
見れば確かに、水槽を取り囲むように螺旋階段が続いている。とんとんと、皮のサンダルが跳ねるたびに、幅広のワンピースのすそが波打った。館内職員の制服を着て、頭に白い帽子をかぶった清掃婦が、掃除の手を休めそっと彼女から身を引いた。
私が上りきったときには、矢井さんは水槽の一点をじっと見ていた。
「亀」
その視線を私は追う。円柱の水槽を反時計回りに海亀は回っている。大きな海亀だった。白い腹を見せて、そのまだらの両ひれを広げて。
「寂しいね」
「何がですか？　」
「亀が」
矢井さんは歌うように、一人ぼっちなんだよこの水槽の中でさ亀は、と言った。
「だからずっと回っている」
「でも下のほうに魚がいるじゃないですか」
「魚類と爬虫類とじゃ、話す言語が違うわ」
彼女はふと黙って海亀が再び旋回してくるのを待って、かめ、かめと呼びかけた。
矢井さんは亀に話し掛けてばかりいるような気がする。亀、海亀さん。

しかし返事に応えずに、海亀はゆっくりとガラスの円柱を旋回する。その様子を目で追う矢井さんは、心なしか少し寂しそうだった。

そう言えば矢井さんは神社でも亀に話し掛けていた。旅行二日目のことである。だから今から言えば、一昨日前のことと言うのだろうか。

ホテルから出てタクシーに乗り込むと、私達は大昔に壊された大昔の官庁の跡を見て回り、そのままこの辺りだけでなく、全国的にも有名な神社へと足を伸ばしたのだった。

千年以上前の省庁と言う、何もない野原を、矢井さんの精力的な前進に引きずられてぐるっと回った後、待っていてくれたタクシーに乗り込む。ホテルから送ってくれたこの老運転手は、私達が旅行者としれると、ここの観光が終わるまで待っていてあげる、と申し出てくれたのだった。料金は、二回に分けて支払えばいいよ、というありがたい申し出に、私達は一も二もなくうなづいたのだ。

クーラーの利いた車内に入ると、彼はニコニコしながら、この辺りはですね、三階建て以上の建物は、建てちゃいかんのです、と言った

「景観が悪くなるといかんというのでね」

確かに車窓から見渡せば、周囲にあるのは低い建物ばかり。二人して同じ方向を見渡す私達に、老運転手は目を細めて、でも何もなかったでしょ、と言った。それに、いえいえ、と矢井さんが首を振る。

「山がありました。遠くに山々が」

あれはきれいですよ、山。彼女の反論に、彼が目を細めたのがバックミラー越しに、見えた。初老の男の目じりに柔らかな皺がよる。

「ええ、あの辺りは毎年、この辺の小学校の遠足コースでしてね。このあいだ孫も、行きましたよ」

「お孫さん、小学校に上がられたばかりなんですね？　」

はいおかげさまで大きくなりまして、抑えきれなくなった笑みが

男の口元からぽろぽろ零れる。その笑顔の柔らかさとは対照的に、手にはめられた白い手袋は、もう長い間彼が握りつづけてきたであろう黒いハンドルを、的確に動かす。タクシーが大きくカーブを描いた。

ここは土産物屋も食べ物やもたくさんあるから、楽しめると思いますよ、私にお釣を返すと、いってらっしゃい、と運転手は微笑んだ。その走り去る黒いタクシーの後ろ姿を見送ると、矢井さんは麦藁帽子をかぶり直し、きびすを返してすたすた歩き始める。私は遅れないように小走りに、駆ける。

「どうして小学校上がったばかりだって、わかったんですか？　」

「なんとなく。勘」

そう言いながら矢井さんの手が、私の肘にすっと伸びてきたから、私はもう少し小走りになって振り切った。手を組むのが恥ずかしかったからだ。今度は矢井さんが私を追いかけて、言った。

「……この間孫も行きましたって、言ってたから」

「え？　」

振られた話題に困惑していると、さっきの話、と彼女は説明する。

「もしお孫さんが毎年行ってるなら、行きますよ、って言うと思ったから。反復されるからね。初めて遠足に行ったから、行きましたよ何だと思ったの。

一回目って、やっぱり特別なんだと思うな、だから過去形」

へぇなるほど、矢井さん名推理。

いやあそれほどでも、と矢井さんはまた手を伸ばしたから、私はきゃっきゃと、逃れた。私のスニーカーがぱたぱた跳ねた。

土産物屋の立ち並ぶなだらかな坂に矢井さんは上機嫌だった。

「ここは元気だ」

うん、とうなづいて彼女は、ここは元気だ、と繰り返した。

元気って、何がです？

「勿論この場所がだよ。なんと言うか、地元に溶け込んでる」

そんなことを言いながら彼女はふらふらとあっちへ行ったりこっちへ行ったり。
ちょっと足を止めて。
「すいません、おまんじゅー、二個下さい」

そんな上機嫌だったのに、矢井さんは扇子を落としたのだ。
彼女は何かあるとその扇子をパタパタ仰いでいた。暑いときもそうでもないときも。
あ。
橋の上で、そう一声高い声を上げて矢井さんが固まったので、私はびっくりして振り返った。彼女が叫び声を上げたとき、私は橋を渡りきろうとしており、橋端で見つけた銭亀に心奪われている彼女を、ちょうど呼ぼうと思っていたところだったからである。矢井さんは橋を、戻ってから池を眺めてしばし呆然とし、ゆっくりと、しかし断固とした声で、池に住む銭亀に命じ始めた。
「ほら、亀、扇子とってこい、扇子」
「そんなこと言ったって、亀は取ってきませんよ」
「わかんないじゃない、そんなこと」
私も橋から降りて矢井さんの隣にしゃがみこむと、来た。しかしそれは亀じゃなくて、鯉で、明らかに餌を貰えると思って来たのだった。
「鯉は嫌いだ」
矢井さんの言葉を聞きながら私は鯉を眺める。白赤黒ぶち三色のモノトーンは、けれど一つ一つ異なっていて、一つとして同じ模様の鯉はいないように思えた。どうして鯉嫌いなんですか？
「なんでも、人から与えて貰えると思ってるとこ。残酷だよね」
「亀はいいんですか？」
「亀はいい。いつも一人ぼっちの甲羅だから」
「けど、さっき亀、泳ぎながら、他の亀とちゅーしてましたよ？」
「うん。あれ、写真撮っておいた？」

撮ってません、と応えると、矢井さんはあからさまにがっくり肩を落として、もったいないなあ、と言って、亀、取ってこい、扇子扇子、と呼びかけを再開した。

あ、亀か。ほんとだ、亀いるねえ。そんな囁きを残しながら、私達の側を参拝者が通り過ぎる。足元では諦めの悪い鯉がばしゃばしゃ跳ねる。矢井さんは説得する。かめかめかめ。

彼女が扇子を諦めるまでに十数分かかった。亀は矢井さんの呼びかけに応えてかそれとも餌と間違えてか、何度か扇子をつつくのだがこちらまで持って来はしないのだ。

残念でしたね、と言うと、最後の手段を使わなかったからね、と答えが返ってきた。

「池の中に入ってくんですか？」

「誰がそんなことしますか。亀に褒美を与えるのよ」

「どんな？」

「もし私に娘が生まれたら、その娘をお前に与えよう！！」

「何で娘なんですか？」

「亀の頭は男と相場が決まっている！！」

卑猥な冗談をすぱっと飛ばすこの美人に半ばあきれながら、私は女の子だったらどうするんですか、その亀が、と問うた。

「あー、約束は約束だから」

「でも、女の子と女の子ですよ」

「やくそくだから」

「女の子同士なんですってば」

何であそこまで意固地になったのか、あの時もよく分かっていながら私は食いついた。自分の声が一オクターブ高くなってる。矢井さんの瞳に映った自分の姿が見る。そんな私の剣幕に少し驚いた表情を矢井さんは見せて、それからそっと顔を近づけた。近づいた影に私は思わず身をすくめ、目を閉じて待ち受けたけれど、予想したようなことは何も起こらないで、ただそっと肩を抱かれただけだった。

「タミコ」
「はい」
あれ、写真で撮って。
矢井さんが指差した場所には自販機が置かれていた。
コイの餌、と書かれたそれは、このひなびた神社の風景に、妙に似合っている。
梅の木々を風が通り過ぎる。
私は何枚かシャッターを切った。その間矢井さんはにやにやしながら私を見ていて、もういいですか？　と尋ねると、今度は私の背中に手を回してきた。今度は振り切らなかった。帽子の影が顔にかかった。
矢井さん。
何？
「名前で呼ぶのは、止めて下さいって」

多くの美の子供で多美子、と父は言っていたけれど、矢井さんはきっと、民子と脳内変換しているに違いない。小学校や中学校の卒業式の寄せ書きに、そこそこの友達づきあいをしていた子からの書き込みで、「民子、卒業しても友達でいようね」とあって、情けない気持ちになったことを今でも覚えている。当の寄せ書きはどこかにいってしまったのに。
苗字で呼ばれるときは、ネタさんと呼び間違われる。ネタ民子か。それは私のもう一つの名前なのだ。悪意があるわけではないだろうから、腹は立たないけれど、それでも少しやるせない。一般庶民の体現みたいで、切ない。
もし自分が本当に民子であったなら、そんなことは気にしないに違いない。多美子。漢字が違うから、気になるのだ。自分と同じ名前の読み方が気になってしまうのは、自意識過剰なんだろうと思う。
これは、だから、自分にしか分からない奇妙なこだわりなのだろう。

だから名前より、コンダさんと苗字で呼ばれる方がいい。矢井さんに「ター」と呼ばれるのは、もっといい。

「ター、さあ」

新宿駅徒歩五分の喫茶店でコーヒーを飲みながら、矢井さんが今回の旅行を持ちかけたのは、今からほんの十日ほど前のことだ。つまり、実際に旅行に行く、ちょうど五日前のことになるか。

私はコーヒーに落としたミルクを、均一の濃度になるまでぐるぐるかき混ぜていた。店内の明かりは白々しい蛍光灯ではなくて、温かいぼおっとした光。カップの陰が光に溶けていた。

「旅行行こう、旅行」

とても気楽な声で、矢井さんは話を持ちかける。私は何のことかわからず、はあ、と相槌を打つ。

この日矢井さんは黒いスーツを着ていた。スカート丈が膝よりももう少し高かった。どきどきした。この人は就職は一度もしたことない、と言っているが、こう言うフォーマルな服装はよく似合っている。確実に実年齢より年上に見えてしまうけれど、とても綺麗だ。唇にひかれた紅に見入った。後で何の口紅か教えてもらおう。

「旅行って、どこまでですか？　」

「遠くまで」

矢井さんの黒いハンドバックから、さっと私の手元に差し出された封筒。入っているのは、二枚の券だ。何の券か判断しかねていると、彼女は、にやっと微笑んだ。

「福引で、あたったの」

こともなげにそう言って、矢井さんはカップに残っていたコーヒーをくいっと空けた。現実に手の中にある何かの券。そのどきどきに私は思わず口を滑らして。

「相変わらず、運、いいですね」

「それで、食べてるからね」

ひんやりした口調で矢井さんが言ったから、私は身を硬くした。

いけない。気を悪くしたか。
矢井さんは、宝くじで大当たりをしたことがある。その大当たりを誰に分けることなく、自分の生活費に充てているのだ。
「ちょうど使い切ったところで、死ねればいいなあ」
と、これまた矢井さんらしい発言を聞いたことがある。けれどそれは同時に、矢井さんの劣等感を刺激している点でもあるらしい。実社会の中で生きていないことが、我ながら歯がゆいらしいのだ。それなら働けばいいのでは、とか思うけれど、多分今矢井さんはこれでいいのだろう。
けれど矢井さんは、そんな冷ややかな様子を一瞬のうちに消し去って言う。
「んで、行く？　行かなかったら、一人で行くからいいんだけど」
「行きます！　」
即答すると。
「よろしい！　同行を許可する！！　」
矢井さんはふん、と胸を反らせた。

矢井さんが当てたのは、ホテルの無料宿泊件だった。
「交通費は自分で出してくださいってところがひっかかるけどね」
「大丈夫ですよ。新幹線を使えば！　」
それくらいの費用は、捻出できますよ。私の発言に、矢井さんはわかってないなぁ、とにやにやした。
「私はね、旅がしたいのよ」
「はぁ」
「旅って言うのは、移動の時間も旅に含まれるのよ」
目的地で過ごすだけが旅行の醍醐味じゃないわ、そう言って矢井さんは、十八切符で行きましょう、鈍行を乗り継いで、と提案したのだ。
一万千五百円、鈍行一日乗り放題の権利を五回行使できるその券を、矢井さんはもうすでに二枚買っていた。私はそれを旅行当日に、

夜行列車の券と一緒に受け取った。
　そして私は、やっぱり土日を旅行にあてたかったなどと思いながら、職場で月曜日をだらだら過ごした。旅支度のしてある中くらいのリュックサックは、朝の内に駅のロッカーに放り込んでおいた。回収して、ホームに向かう。
「十八切符って十八歳までしか使えないんだと思ってました」
　私の言葉に、矢井さんはげらげら笑った。だって、青春十八切符でしょ？　十八歳の若い子しか使えないって思っても、仕方ないじゃないですか。真っ赤な顔をして言い訳する私に、矢井さんは、私は十八回使えるんだと思ってた、と応えた。
「たった五回なんて、ＪＲはケチね」

　長旅の末たどり着いたホテルはとても大きかった。駅から歩いて数分の場所。私たちは食事の前にチェックインした。赤い絨毯、エントランスは広くて、ポーターもいる。
　宿泊料と比べたら、確かに交通費の方が安そうだった。
　ただし、片道だけは。往復ならきっと宿泊料の方が安いだろう。一泊無料チケットの価値が、どこまでのものか分からないが、やはりそれほどお徳とも私には思われかねた。それでも、今私が勤めているところは、出張があるような会社じゃないから、大きなホテルに泊まるという出来事に、私は少し興奮して。なるほどこの興奮もお得のうちなんだなあ、ととりとめなく思ったりしていた。
　ちょうどフロントは込み合っていて、矢井さんと私は、足をとどめてそれが空くのを待った。
「こんな大きいホテル入ったの、結婚式以来です」
「友達の？　」
「いいえ、上司の」
「あら、その人。ずいぶん年取って結婚したのね」
　いえ、矢井さんと同い年です、と応えると、矢井さんはげらげら笑って。

「けちで結構、か」と呟いた。
「矢井さん、けちなんですか？　」
「あたしはけちだけど、そう言うことじゃない」
けちで結構、結婚まだ早い、って節回し知らない？　と彼女は口ずさむ。低い擦れるような、彼女の歌い方。
「あ、聞いたことは、あるかも」
世代が違うんですよ、きっと、と意地悪を言うと、奇妙な顔をして、むむむと矢井さんはうなった。大丈夫ですよ、矢井さんだってまだ結婚できます、とフォローを入れようとしたけれど、私の口からはその言葉は出なかった。矢井さんが結婚するのは嫌だった。黙ってしまった私をにやりと見て、彼女は、まあ適齢期過ぎちゃったからねい、と軽口を叩いた。そして彼女は、肩にかけていた黒い手提げ鞄を私に預け、すたすたとフロントに向かう。
矢井さんはいつもそうだ。自分の思ったことは言うし、やりたいことは自分の思った通りにしかしない。置いてけぼりにされてしまった人の気持ちを、彼女は分からないに違いない。本来この人は、たった一人でも平気なんだろう。一人で遠く遠くまで歩いていってしまえるのだろう。そんなに強い癖に、強い癖に彼女は……。
フロントで二三言葉を交わした矢井さんが、突然、ふ、と振り返った。
その美しい髪を波打たせながら戻ってくる。微笑を浮かべながら。
……どうしたんですか？　自分の寂しさを見破られたのかと思って、身を固くした私に矢井さんは、ごめんター、わたくし無料チケット、鞄に入れっぱなしでした、と言った。
「なにやってんですか？　あなた」
試しに、ものすごく軽い口をきいてみた。
矢井さんはそれには無反応で、鞄の外側のチャックを開けて、薄っぺらなチケットを取り出し。
「あった。あった」と笑った。

その後、私たちは牛の内臓のすき焼きをつついた。もつのすき焼きを食べるのは、初めてだ。内臓は壺の中でしょうゆダレに甘辛く味付けされていて、それをかんかんに焼いた石焼鍋にいれて、大量のねぎと一緒に煮る。底の浅い石鍋は、じゅうじゅうと音を立てながら、煮えてくる。ぐつぐつ。

「明後日はいいとして。明日はさ。どこへ行こうか」

もつを噛みながら矢井さんが言うので、私は鞄の中からこの日のためのガイドブックを取り出した。鮮やかな表紙のガイドブック。それを見た彼女の顔が、困ったように微笑んだ。哀れむような視線に私は少なからず傷ついたけれど、黙って気づかない振りをした。

矢井さん曰く、どこと定めず行き来するのが旅行の醍醐味で、そもそもガイドブックなんて、なんの役にも立たない、と。けれどそんなことを言っても、何も調べなければ、どこに何があるか判りはしないじゃないではないですか。

私が幾つか上げた観光スポットの一つ一つに、矢井さんは丁寧にうなづいた。なんだか悔しいから、矢井さんはどこに行きたいですか？　と尋ねたら。

「海が見たい」

と返事がきた。

矢井さんは、海が見たい。

「海なら、貝殻城に行く時見れますよ。だから明後日ですね」

それを聞いて矢井さんはうなづく、なら安心だ。

「明日はぶらぶらしよう」

無目的と言う目的が決まって、矢井さんはにんまり笑った。

空になった鍋とビール瓶を見て、カウンター越しに女将が私達に注文を聞く。

「お鍋の中に入れるの、おうどんにします？　それともラーメンにします？」

卵を落として、お雑炊にしてもらった。おいしかった。

そういえば矢井さんは食べるのが好きだ。
よくあのプロポーションが保てるものだと思う。まぁ、旅行中に健康のためと言いながら、唐突に腕立てふせや背筋をし始めたりするのを見ると、毎日の少しずつの運動がこの人にはずいぶんな効果を上げているのよのう、と思ったりもする。
そんな矢井さんは、基本的に入る店が気に食わなければ、すぐに出て行ってしまう。今回の旅行でも、最後の日、夜行列車待ちに入った小さな店に、早々と見切りをつけると、私に目配せして、さっさとお勘定をすませてしまった。そして気に入った店で、わいわいぱくぱくもぐもぐやるのだ。その店は値段もそれなりだった。
安い居酒屋のときは、徹底して安さだけを追求し、あまり味には文句を言わないかわりに、納得がいかなければすぐに出てしまう。矢井さんはお金がないわけではないのだから、多少値が張ってもいいはずなのに、三食に一食は質素に済まそうとする。
「一日に使えるお金は限られているのよ」
矢井さんはいつもそう言いながら、日本酒をちびちび飲む。
「一生働かないつもりなんだから」
そんな彼女でも、この土地でラーメンを食べるのは楽しみにしていたに違いない。無目的のはずの二日目のお昼、ラーメンでも食べましょうかと提案したときの彼女の顔と言ったら。
「そんなに、楽しみにしてたんですか？　」
「別に」
そっけなく口にしたけれど、矢井さんの口元はほころんでいた。
実は私もここのラーメンを楽しみにしていたのだ。東京でこの手のラーメン屋に入ると、後味がすっぱいような、その上お腹の奥のほうでずんともたれる感覚がある。正直に言えば苦手な部類だ。どろりとにごった白濁は、骨や肉の脂が濃く煮出された証拠だ。しかし聞いた話では、本場のラーメンは味付けが全然違うらしい。あっさり食べられるのだそうだ。
豚の骨を煮込んで作った、白いラーメン。どんな味なんだろうか？

「有名店を、チェックしておいたんですよ」
私の声がはずんでいたのは、一晩かけてガイドブックからその店を選んだからではなくて、むしろ矢井さんを慰めるためだったかもしれない。矢井さんが扇を亀の池に落としたのは、この少し前だ。表面にこそがっかりして見せないが、ときたま亀、亀のばかと呟いている様を見ると、やはり気にしていたのだろう。
神社の管理人に扇を取ってもらうよう頼もうかと提案したけれど、矢井さんは「ん、いい」と言ってすたすた歩いた。これは痩せ我慢だ。矢井さんの背中がそう言っている。
だから、矢井さんが喜んでくれるなら、なんでもよかった。
店内は薄暗く、照明で以って落ち着いた雰囲気を出すための工夫がしてある。そしてそこは一つ一つ区切られた席で、隣の人と話たりすることが出来ないように仕切られている。テーブルの上には、注文書、が置いてあり、自分の食べたいラーメンと、細かな注文（硬く煮るか柔らかく煮るか、脂身は多いか、具はどれにするか等等）をチェックして、無言で店員に渡せるようになっていた。
面白いシステムだ、と思う。食べることに集中させるために、ここまで心を砕いていると知って、何だか好感が持てる。
そう思いながら何気なく、店を紹介する小さなパンフレットを手にとって、思わず心臓が大きく揺れた。
東京に支店があったのである。
うかつだった。
勿論矢井さんも、このパンフレットに気づいているだろう。なんと思っているだろうか？　味わったり感じたりするのに、厳しい人だ。怒っているかもしれない、がっかりしたかもしれない。ちらちらと隣をうかがうけれど、壁があって、見えない。ゆっくり一人きりで食べるための、間仕切りがあって、見えない。
そんな私の目の前には、小さな暖簾がある。その暖簾の隙間から、にゅっとどんぶりが押し出されてきた。
「おまたせしました」

隣からも、同じ呼びかけが聞こえる。私は箸を割って啜り始める、するするするする。ずるずるっと、聞こえてくる威勢のいい音は、矢井さんの音だ。

東京でも食べられる、ご当地ラーメンの味。私は箸を休め休め、食べる。汗が出てくる。ため息混じりの息をつく。

なんで東京に支店があるか調べなかったのか、呪わしい気持ちで一杯になりながら、麺を啜る。アクセントのはずのタレが、辛い。

「替え玉下さい」

壁の向こうから、矢井さんの声がする。麺を食べて、残ったスープに入れるお代わりの麺を貰っているのだ。かしこまりました、の返事の後、少ししてからことんとお皿の置かれる音が聞こえた。そしてまた一気に啜りこむ音。矢井さんは元気だ。

スープは残した。ラーメンはおいしかった。

こんなことばかり思い出していると、まるで旅行中、二人で食べてばかりいたみたいだ。そして実際それはあたっている。私達の旅は、移動し、食べ、移動し、飲みのまだら模様で、それ以外はいつもの日常と変わらない数日だった。人間の生活は結局、その動作の連続だ。そんな中にいつも矢井さんの、奇妙な自分理論がスパイスされる。私は彼女の世界に振り回されて混乱する。矢井さんは人を、煙に巻くのが好きだ。生きがいであると言ってもいい。

ラーメンを食べた後でも、彼女は「リカちゃん、わかった」とにやにやしながら呟いたのであった。

「ここの男性住民は、東京の男たちよりも繊細。リカちゃんと分かった」

「なんでです？　」

「わざわざラーメン食べるのに、仕切りがないとおちおち食べてもいられないなんて、繊細も繊細じゃない？　」

その理屈はなんだかとても不思議な気がしたので、なんで男の人って決め付けるんですか？　と聞くと、だってラーメン屋って男の

行く店って雰囲気するじゃない、と矢井さんは応えた。
「男の人の行く店って雰囲気がラーメン屋にあるなら、女の人は行きづらいじゃないですか。あの仕切りは女の人ためじゃないんですか？」
「？
あたしは平気だよ」
と首を傾げる。
そりゃあなたは平気でしょう。
きっと矢井さんは、男の人の前でも女の人の前でも、ずるずる音をたててラーメンを食べれるに違いない。

何か食べましょうか？
ちっとも食欲がわかないくせに、戯れに口にしてみる。矢井さんはやっぱり、いらないおなか一杯、と言う。蒼い海の中で。
海が蒼いですね、と言うと、私のいる場所は海じゃなくて、水槽だよ、と言われた。住み心地のいい水槽だよ。ターはいいね、泳いでいける。社会の波の中でも、そりゃ苦労もあるだろうけれど、きちんと、自分で。
「私は幸運にも、社会にでなくてよくなったからね」
矢井さんが苦笑する。魚たちがゆらゆらと身をくねらせる。見上げれば、遥か遥かかなたに亀の影。時計回りに回る、夏の午後四時。
新しく注いだお茶が、ゆっくりと冷めていく。

ター。

呼びかけてそっと矢井さんの手のひらが、私に向けられる。大きな手、柔らかい手。そんな手を、私の小さな両手が、すっぽり包んでしまう。

私は旅行中、二度だけこの手を握った。
一日目の夜、ベッドの中でつないだのが一つ目。
貝殻城の中で握ったのが、二つ目。

貝殻城に行く。
それが今回のメインのイベントになっていたのは、いつごろだったろう？
旅行の目的もないままふらふらする、と言うのは、私には苦手だったので、是が非でも行き先を決めた。
「貝殻城？　」
矢井さんはその端正な顔を奇妙にぐなぐなさせて、私に問う。
「はい、貝殻城です」
貝殻と言っても、帆立貝のような二枚貝ではない。巻貝の形をした建物である。巻貝と言っても円錐ではない逆円錐の形をしている。どうやって安定を取っているのか、不思議と評判のところなのだ。
「で、どうやって釣り合いを取ってるの？　」
「そこがミソなんですよ」
「ミソなのか」
浜松を過ぎて、私達は駅で買ってきたうなぎ弁当を食べながら、そんな話をしていた。この辺りは、自販機のお茶が美味しい、そんな話題の後である。矢井さんに旅の目標を告げたのは。
「どこの企業の持ち物なのかしら」
「さあ？　公共の施設じゃないですか？　」
ふうん。
息を吐いて、矢井さんはお茶を口に含む。美味しいわね。うなぎですか？　ううん、お茶。
ぱっと扇子が開く。ひらひら揺れる。そしてそっと顔を隠す。欠伸の音が聞こえた。
その欠伸が、なんだか自分と一緒にいることへの退屈を現してい

るようで、不安になる。食べ終わったうなぎ弁当の箱を折りたたんで、私は小さくため息をつく。
「眠いわよね」
矢井さんの言葉に私は、はい、はあ、まあ、と曖昧な返事をする。ため息を聞かれたりしなかったろうか？　ぎゅっと心臓が痛くなると。
「いいのよ。ターも寝たら？　」
この後私は何度も、ターも寝たら？　と声をかけられることになる。私はそれに対していつも曖昧に応えて、うたた寝したり、本を読んだり、車窓に目をやったりしていた。
遠くまで、運ばれていく。
電車に揺られる、その揺れが疲労として、徐々にたまっていくのがわかる。移動の時間までも旅行、と矢井さんは言ったけれど、私はやっぱり現地での時間をたくさん過ごしたかった。旅の移動は手段ではないか。もし矢井さんが自分の分の運賃をだすのがもったいないと思ったのなら、私が払ったっていい。それは確かに結構な額にはなるけれど、それを出せるくらいの貯金ならあるのだから。
けれど矢井さんは、きっとその提案を断るに違いない。それもとても残酷に断るに違いない。彼女にはそんな怖い雰囲気がある。だから私は何も言わない。それはそれで、何となく自虐的に、楽しい。

「セミダブル？　」
矢井さんが、きつい声で、言った。
「はい」
「どうして？　これ、二人用の部屋って書いてあるじゃないの――」
あの豪華なホテルのフロントで、矢井さんがもめているのを見て、私はその側に近づいて。
「どうしました？　」
と聞いた。
「え？　なんかね、ツインとか言ってたのに、今セミダブルしか空

いてないとかいうのよ」
　それに対して、フロントマン氏の返答は滑らかだった。
　そこにはツインまたはダブルのタイプ満室の折には、別タイプの部屋が用意されると記してある。先日の予約の電話の際、確かにセミダブルとお伝えしてある。夏休み入りぎわで、家族連れの数も多く、ツインダブルは埋まりぎみである、云々云々。
　慇懃な応対の割には、こちらの言い分に譲歩する気配はまるでなさそうだった。
「狭いベッドで、一緒に寝られるの？　」
「ええ。一応ベッドのサイズは、ダブルのタイプですので」
「そう」
「お二人様お休みになられる分には、特に問題は無いかと」
　一瞬そのフロントマン氏が、値踏みするような目で私達を見た。それはきっとこの二人が、ベッドにきちんと収まるかを確かめるためのものであったろう。自分に流し目を送られたような気がして、ムカッとした。
「あーあ！　ケチっくせ！　ケチっくせ！　」
　矢井さんが、部屋の中に入ってぶつぶつ言う。セミダブルの部屋は、その名前の印象よりかは広くて、けれど二人で使うにはギリギリの部屋だった。
「大体さ、スイートルームとかだってあるんだから、あぶれた客はそっちに回せばいいでしょうに！　無料チケット配って、宣伝に努めるんなら、そんくらいのサービスはしなさいよね！　」
　なんだかもう言いがかりに近い。それは自分のために言ってくれているのが分かっているから。
「いいですよ、矢井さん。私は満足です、この部屋。高くて見晴らしもいいし」
　と言うと。
「あ、そ。そんなら、いい」
　とあっさり怒りを放棄して、矢井さんはテレビをつけた。テレビ

をつけたとたん、見知らぬ部屋がなじみのある部屋になる。ＮＨＫは全国どこでも変わらない。その平凡さが非凡だ。
ベッドに腰掛けると、隣に矢井さんが座って。
「ごめんね。きちんとチェックしてなくて」
と言った。
私は答えないで、矢井さんを押し倒して、ベッドの上でキスした。
私より年上の矢井さんは、拒むでもなく受け入れるでもなく、じっとキスを受けていた。
気がすんだので身体を起こしたら、矢井さんが。
「なんだかなあ」と言った。
「なんですか？　」
「なんでもない」
そろそろ晩御飯食べにいきましょうか。おいしいお店があるみたいですよ？
その後、私たちは牛の内臓のすき焼きをつついた。新鮮なもつが、おいしかった。
帰ってきて、交代でお風呂に入ったら、旅も疲れもあって一緒に寝てしまった。手を繋いで、ぐっすり寝ていた。

＊

「思ったよりよかったわね、貝殻城」
矢井さんは手酌で自分の白い器に、金色の烏龍茶を注ぐ。海に酔っていた私は、はあ、とうなづいた。私にとって貝殻城は、矢井さんはすごいなあ、元気だなあとひたすらに言い続けるための場所であって、それ以上の意味は無い場所だった。とにかく熱かった。目が眩んだ。
逆向きの貝殻の外の殻をぐるぐると回りながら、天に向かって歩んでいく。結構な高さである。それなのにこの道は満足なガードレールがないのだった。下手に道から身を乗り出せば、落ちてしまう。

「お花もきれいだったし」
「そうですね」
炎天下でも元気な、庭園の花々。呪われろ。そして矢井さんもその花の一つなのだ。真っ白な花。真っ白な花は私の手を握って、夢中で駆けて行く。
「うわあ」
歓喜の声があがって、矢井さんの動きが止まる。脱水症状を起こしかけたのか、頭の奥がガンガンし始めた私を、涼しい風が撫でた。
目の前には、巨大なドルメンがあった。
旧石器時代の墳墓とも言われている、巨大な石を三つ使った建築物がある。その向こうに海が見えた。貝殻城は思った以上に高い建築物なので、その遠くの果てに、島の影まで見えた。
「海は」
「はい」
「広いね？　」
「はい。大きいですね」
「月も上るね」
「そしたら日は沈みますね」
あまりに当たり前の感想が、歌の歌詞のようだったから、一曲歌った。止まらなくなった。だからそのまま海にまつわる歌を何曲か歌った。潮風がきもちいい。海猫が鳴いた。白い点が、海の上にぽつんぽつんと見えた。
「お魚咥えたウミネコ追っかけて」
矢井さんが握っていた手。今は繋いでいる。ドルメンの前で座って。でたらめな替え歌を歌いながら、矢井さんは私の手を繋いで、歌っている。私は汗をかいている。繋がった手のひらが、一番汗をかいている気がする。さあっと雲の動きが速くなってきて、突風が吹いた。
「きゃあ！　」
女の子みたいな声を上げた矢井さんが、今度は「おわ！　」と叫

んだ。矢井さんは本当に物をよく落とす。扇子も落とす。麦藁帽子も、落とす。
「ま、待て！」
草原の上をもんどりうちながら転げていく麦藁帽子は、ドルメンを越えて風に乗った。矢井さんは、足がもつれて草原の海に倒れ伏した。
狙っていたように麦藁帽子は空を飛んだ。
「あの麦藁帽子、誰か拾ってくれたかしら」
矢井さんはポツリと呟いた。
「海に飛んでいった風船を、クラゲと間違えて海亀が食べてしまうと言う。そんなことになっていないかしら」
「大丈夫じゃないですか？」
「ターはなんでそう言い切れるの？」
「根拠はありません。なんとなくです」
「そう」
そういって矢井さんは、私の前に手を投げ出してきた。冬にはコタツになるテーブルの上に、矢井さんの細い白い手がある。
「腕相撲しましょうか？」
「ばか」
「海入れなくて、残念でしたね」
「いいよ。貝殻城で見れたから、いい」
今年の夏は、一緒に海行きましょうね、今度こそ入りましょうね、と言おうとして、口に出すのは止めた。予定を決められるのが、この人は大嫌いだ。こちらから予定を立てない方が、返って私に都合のいい動きをしてくれることが、多い。
「多美子」
「なんですか、理香ちゃん」
「今日、泊めて」
「嫌です。明日仕事です」
「冷たいよ」

「今日は暑いです」
「じゃあ風鈴吊って」
「脳味噌茹ってるでしょ、ほんとは、矢井さん」
私が軽口を叩くと、彼女は子供みたいな笑顔を浮かべた。
「コイに餌やっても、意味ないんですよね」と呟いたら。
「そうだね」と矢井さんが言った。
「なんでも与えてもらえると、思ってるもの。それで愛情を注ぐと、ぶくぶく太るばっかりで。その癖色ばかり鮮やかで」
私は手を握った。それから軽く噛んでみた。それから。
「なんだかなあ」と言ってみた。矢井さんは、受け入れるでもなく拒むでもなく、じっと噛まれている。とろんとした目をして来たと思ったら、大きな欠伸をして矢井さんは寝てしまった。戯れにそっとその唇に手を伸ばしたら、その形のいい唇がゆっくりと私の親指に吸い付いて、咀嚼した。
夏の日暮れは遅い。時計の針はあれからずいぶん進んでいるのに、部屋の中はまだ午後三時の暗がりを留めている。
矢井さんは帰らない。
海も還らない。矢井さんと私に、濃密に吸い付いている。物言わぬ亀が、その周りをぐるぐる回っている。頭には麦藁帽子をかぶっている。
ちゅーをするために、私は腰を浮かす。

（了

（後書き）

読了感謝

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8270j/

貝殻城旅行雑記

2010年10月8日13時54分発行